

森田一弥

職人目線の京都行脚

土壁編 文化財・伝統技術に 詳しい建築家の視点で

愛知の田舎から上京して京都に住み始めて30年が経つ。大学で建築を学び、卒業後、左官職人として京都の文化財の修復に携わり、設計事務所を立ち上げ、仕事の傍ら京都の街を眺めてきた。この機会に、建築家、そして職人としての視点から京都の街の魅力を記してみたい。

日本の建築は「木」でできているとよくいわれるが、実は「土」からできている部分かなりの割合を占める。例えば瓦屋根の瓦の原材料は土であるし、お寺や町家の壁は大抵、土でできている。京都に住む我々は、実は土に囲まれて暮らしているのである。



大徳寺の練塀。瓦を練り土に挟んで積み上げている



拾翠亭の土壁は赤みがかった錆土仕上げ



静岡の土蔵。風雨に打たれた土壁の表情が美しい

次の層の接着を強めるために帯で描いた独特の模様が残っていることがある。また風雨によって表面の土が流され、中に含まれていた砂利や藁が表面に現れ、なんともいえない表情を見せることもある。

かつては木や土など軟らかい素材で造られていた京都の建築も、タイルやセメントなど年数が経っても風化しない、硬くて丈夫な素材で覆われるようになった。そんな時に、年月を経て真っ黒に「サビた」土壁や、柔らかくて風や雨に打たれて風化した土塀を見ると、なんだかかほっとしたような、あたたかい気分になるのは自分だけではない。

土蔵の外壁は木造の骨組みをぐるりと覆うように竹の下地を編み、その上に土を何度も塗り重ねて30センチもの厚みにもなる、伝統的な耐火建築物である。

私の住む静岡にもたくさん土蔵が見られる。土蔵は土が十分に乾燥してから次の層を塗り重ねるため、下塗りのまま何年も放置することもある。仕上げをしないまま年数が経った土蔵の土壁には、

のであり、草庵茶室では土壁の「さび」と呼ばれて特に珍重される。土壁に鉄粉を混ぜて塗ることでホタルが飛んでいるように見える効果を出した「蛍壁」と呼ばれる風流な土壁技術もある。

京都の街歩きで土壁を観察するのに一番良い観察対象は、土塀である。土塀は、土で作った日干煉瓦を積み重ねたものや、版築とい

京都御所の一角にある拾翠亭は、もと九条家の邸宅跡である。和室に塗られているのは、柔らかい赤みの錆土（もしくは桃山土）で、これが土の色かと見まがうほどにつややかで色気がある土壁である。その一方で茶室の土壁は、表面が真っ黒に変色している。これは土の内部に含まれるミネラル成分が表面で酸化して変色したも

〈もりた かずや〉
1971年愛知県生まれ。森田一弥建築設計事務所主宰。1997年、京都大学工学部建築学科修士課程修了。京都「しづくい浅原」にて左官職人として修業後、2000年、森田一弥建築工房設立。2007～2008年、バルセロナのEMBT建築事務所にて在籍。2011～2012年、文化庁新進芸術家海外研修員としてバルセロナに滞在。2020年～京都府立大学准教授。共著に「京都土壁案内」など。